

## もう一つのバイロイトの第九



日本盤「バイロイトの第九」。このデザインは結構好きです。

日本、あるいは世界で最も有名なベートーヴェンの第九交響曲の録音は、通称「バイロイトの第九」と呼ばれるフルトヴェングラー指揮のものであることは言うを俟たないでしょう。

最近この「バイロイトの第九」の別の録音(テイク)が「日本フルトヴェングラーセンター」から発売されました。この「もう一つのバイロイトの第九」は全編が無編集となっていて、1951年の「バイロイトの第九」の真の意味での実況録音といえるものです。

これまでにも「バイロイトの第九」は、有名な足音や不自然なノイズ、テンポなど、編集によって手が加えられた形跡があると言われてきたのですが、この録音が新たに発見、発売されたことによってそれが裏付けられる結果となりました。このCDについては朝日新聞などにも取り上げられ、概ね意義深い録音として紹介されています。

ともすればこの度発売されたCD(以後、新CD)が、編集したもの(以後、旧LP)と比して、そのリアリティの高さから、よりフルトヴェングラーの演奏に肉薄している、というような風潮もあるようですが、これについては慎重に考える必要があるかと思えます。

第一に新CDは、放送用あるいは記録のために録音されたものですが、旧LPは、レコードとして発売するための音

源であるということです。

ここでの問題は、レコードとして発売される音源で、無編集というものは極めて少ないということです。ましてやHMVのような大レーベルでは皆無といってよいでしょう。すなわち、レコードとして発売された音源は、無編集であることを期待できないことはもちろん、編集したものがより完成度が高いとも言えるのです。

第二に、新CD、旧LP共に、フルトヴェングラーが承認した音源ではないことです。

これはある意味で重要な問題です。フルトヴェングラーが承認していないということは、これら2つの録音は「フルトヴェングラーの演奏」ではあるけれども「フルトヴェングラーのレコード」ではないということに他なりません。

旧LPについては、このような伝聞もあります。HMVのプロデューサーであるワルター・レッグが「バイロイトの第九」の編集を済ませ、フルトヴェングラーもそのテープを聴いたものの、余り録音が良くなかったこともあって、いずれまた新たな録音を行う予定でお蔵入りにしたのですが、1954年にフルトヴェングラーが急逝してしまったため、止む無く発売したというのです。

もしこのとき発売を取りやめた理由が録音の質だけであるのなら、編集された演奏そのものはフルトヴェングラーの承認を得ているとも考えられますが、こればかりは真相を知る術が我々には残されていません。

いずれまた俎上に乗せたい話題でもあるのですが、私は演奏者の承認というものは、レコードの最も重要な要素の一つであると考えています。レコード録音というものは演奏者やエンジニア、プロデューサーなど多く人によって創りあげていかれるものですが、演奏者の演奏なくしてレコードは存在し得ないからです。

ミュージックバードさんには、この新旧の「バイロイトの第九」を通して、新旧の存在の意義や編集の是非などの問題点について、聴き比べながら検討するような番組を期待したいところです。